View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

愛知県立看護大学紀要 Vol. 14, 37－43, 2008
Bull. Aichi Pref. Coll. Nurs. Health

■研究報告■

育児支援訪問ボランティアにおける看護学生の体験や学びに関する検討

大林　陽子[1]，高橋　弘子[1]，恵美須文枝[2]，岡田　由香[1]，志村千鶴子[1]，神谷　摂子[1]，緒方　　京[1]

Experiences and Learning of Nursing Students as Child Support Visitation Volunteers

Yoko Obayashi[1], Hiroko Takahashi[1], Fumie Emisu[2], Yuka Okada[1], Chizuko Shimura[1], Setsuko Kamiya[1], Miyako Ogata[1]

本研究は，育児支援訪問ボランティア活動報告書の記述から育児支援における学生の体験や学びを明らかにすることを目的とした．研究対象は平成17年度に本学の育児支援訪問ボランティアに参加した看護学生11名が記述した『本日の活動報告書』の内容である．この内容を検討した結果，学生は母子との関わりをとおして，【複数の子どもを育てる母親の状況の理解】や【きょうだいのいる子どもの状況の理解】をしていた．また，母子と過ごす中で，【新しい体験や感謝される体験からの学びや喜び】を得ていた．さらに，母親の育児の実際から，【母親の育児方針を理解し尊重する大切さの理解】をしていた．育児支援ボランティアは母親の心身の負担を軽減すると同時に，学生にさまざまな学びをもたらし，双方向の関係が築かれていたことが明らかになった．

キーワード：育児支援，訪問ボランティア，看護学生，体験，学び

Ⅰ　はじめに

今日の少子社会，核家族という手助けの少ない環境や地域社会とのつながりが希薄な現代社会において，育児には地域社会の支援が必須である．特に，就園前の子どもをもつ母親は家事支援の提供など非専門的な支援も必要とされるが，実際には支援を受けられず，身体的・心理的負担をもつ母親は少なくない．このため，夫婦に尋ねた平均予定子ども数は理想の子ども数より減少し，その理由に「これ以上，育児の心理的，肉体的負担に耐えられないから」が21.6%に上り，「子育てが楽しい」と感じる母親は低率であるといわれる[1]．これらの観点をふまえ，本学では平成17年度から大学の地域貢献の一環として，学生が大学近辺に住む経産婦で末子が１歳未満の家庭を訪問し，母親の子育てを支援（以下，育児支援訪問ボランティアとする）してきている．

これまでの学生のボランティア活動に関する調査では，小野らが看護学生が組織し活動した育児支援ボランティアにおける場面を選定し素材化して学生の成長過程を分析し，「経過とともに家族自身で健康的に生活が整えられるような支援へと学生の関わりが発展している」[2]と述べている．また，吉村らは看護学生の障害児サマーキャンプにおけるボランティア活動をとおして，「家族理解や家族支援の学びに効果があり，その後の成長にも大きな影響を与える」[3]と述べている．恵美須[4]は大学と地域の連携による看護学生および地域住民の育児支援ボランティア活動におけるグループインタビューの調査で，学生と住民が子育て中の母親の状況を理解し，子どもとのふれあいによる新しい体験や母子からの感謝されることが貴重な体験になっていたと述べている．本学では同様の活動を看護学生のみで行っており，今後の継続した活動にあたり，学生の体験や学びを明らかにし，今後の活動の示唆を得たいと考えた．

本研究の目的は育児支援訪問ボランティアの『本日の活動報告書』の記述から育児支援における学生の体験や

[1]愛知県立看護大学（母性看護学・助産学），[2]前首都大学東京　健康福祉学部

学びを明らかにすることである.

Ⅱ　育児支援訪問ボランティアの概要

１．訪問前の準備

学生と利用者に共通の育児支援訪問ボランティアマニュアル（以下，ボランティアマニュアルとする）を作成した．また，ボランティアの理念に関する講義や育児技術・救急処置の演習を含む研修会を開催し，育児支援に関心をもつ学生の学習および学生同士の交流の場とした．学生の募集は研修会の案内掲示とともに行い，利用母子毎に5～6名の学生と相談役教員１名によるグループで活動を開始した.

２．訪問活動の実際

利用者は守山区の開業助産院の掲示板で２組の母子を募集した．初回は教員が同行し，ボランティアマニュアルに基づき活動内容や活動方法（訪問時間帯，回数，期間など），留意事項を確認した．２回目以降は学生が２人一組で訪問し，母親の意向にそって相談しながら活動した．学生同士の情報交換は『本日の活動報告書』(図１）と定例ミーティングで行った．予定のボランティア期間の終了時点で学生と利用者，学生と教員で活動を評価し，活動方針を確認，ボランティアマニュアルを見直した．ボランティアは無償で活動し，交通費は学生の負担とならないようにした.

育児生活支援プロジェクト in 守山

本日の活動報告書　　報告者氏名（学年）

対象者氏名 住所	
訪問学生氏名	
訪問日時・天候	平成 17 年　月　日（　曜日）天候／＿＿ 時から　　時まで
活動内容と 気付いたこと	
次回への提案	
次回 訪問予定日（曜）	

経路（往復）
交通費

図１　活動報告書の実際（A4版）

Ⅲ　研究方法

１．分析対象

平成17年10月から平成18年２月に育児支援訪問ボランティア活動に参加した看護大学生11名（1～3年生）が記述した『本日の活動報告書』の内容を分析対象とした.

２．調査期間

平成17年10月から平成18年２月であった.

３．データ収集および分析方法

データは，ボランティア活動後に学生が記述した『本日の活動報告書』の「活動内容と気づいたこと」と「次回への提案」から収集した.

分析は，データ全体を２回読み返した後,「活動内容と気づいたこと」と「次回への提案」の中から学生が活動をとおして体験し，学んだり感じたりしたと考えられた内容を意味ある文脈ごとに区切り，コード化し，抽象化の作業を経てカテゴリーに分類した．その際，研究者間で検討し，疑問が生じたコードやカテゴリーについては『本日の活動報告書』の記述に戻って検討し，信頼性と妥当性の確保に努めた.

４．倫理的配慮

学生には事前にこの活動が科学研究費補助金により助成されたものであり,『本日の活動報告書』の内容が研究対象として取り扱われることを説明し，文書で同意を得た．また，研究の主旨や内容を文書と口頭により説明し，自由意志による参加，データの守秘，分析時点での匿名性を保証し，協力の同意と公表の了承を文書で得た．ボランティアの対象者にも個人情報は研究目的以外には使用しないことやプライバシーに配慮することなどを説明し，口頭による承諾を得た．なお，本研究は首都大学東京健康福祉学部の倫理審査委員会で承認された.

Ⅳ　結　　果

１．育児支援訪問ボランティア活動の実際

学生は２名１組で訪問先に出向き，2～3時間滞在し，母親の要請に応じて活動した．今回，２家庭（以下，A宅，B宅とする）に訪問し，訪問回数は，A宅は平成17年

10月から平成18年２月までの23回，B宅は平成17年11月から平成18年２月までの20回であった．また，訪問先の母親は共に30歳代で，初回訪問時の子どもの年齢は，A宅は４ヶ月（女児）と２歳８ヶ月（女児），B宅は４ヶ月（女児），３歳（男児）と５歳（男児）であった．育児支援の実際の活動内容を表１に示した．なお，毎回の活動内容や母子の様子は『本日の活動報告書』に2〜3枚にわたり記述され，次回の学生に引き継がれた．

２．育児支援訪問ボランティアにおける学生の体験や学び

学生の活動報告書をもとに内容を検討し，大カテゴリーとして，【複数の子どもを育てる母親の状況の理解】，【きょうだいがいる子どもの状況の理解】，【新しい体験や感謝される体験からの学びや喜び】，【母親の育児方針を尊重する大切さの理解】に分類された．以下，中カテゴリーを《》，小カテゴリーを『』，学生の記述を「」，母親の言葉を‘’で示した．

１）【複数の子どもを育てる母親の状況の理解】（表２）

学生は，３ヶ月児は「お通じがよいそうで，毎食後とおやつ後くらいにおむつ交換をする」，「‘買い物の時，好奇心旺盛な児が勝手にどこかへ行ってしまう，○○は自由人だから.’」という母親の言葉から，『子どもの特性を把握している母親』を理解していた．一方，「児が活発なので，一緒に遊ぶのに体力が必要」と記述し，複数の子どもを育てる母親が『体力を要する育児』をしていると捉えていた．同様に，「母親は‘（５ヶ月）児が大泣きしているので，落ち着かないと飲めないわね’と言って児を落ち着かせながら，その間，３歳児のお昼を温め……大変そうでした」と記述し，『複数の子どもの世話をする育児の大変さ』を理解していた．また，「二人ともお昼寝は殆どしないため，育児から解放される時間がなく，母はかなり疲れた様子」と記述し，『育児による母親の疲労』を理解していた．さらに，「母は‘妊娠してから頻尿になったり，産まれた後も夜泣きがあったりで，朝まで一度も目を覚まさずに熟睡することがない’とのことでした」と記述し，母親の話から『育児により休息できない母親』を理解し，《母親の身体的負担の理解》をしていた．

学生は，『しつけの線引きが難しい』，『子どもの成長発達に関する気がかり』に関する母親の言葉を聞き，悩みながらの子育ての状況を知った．そして，「母がBCG接種から帰ってきた時，育児にかなり疲れを訴えたのでもっと話を聴くなど少しでも疲れを軽くする働きかけが必要」と，『母の育児疲れの軽減のために必要な傾聴』を

表１　育児支援の実際

活　動　内　容	
赤ちゃん連れの外出の手伝い	買物に同行して上の子の世話，母親の歯科受診に同行して子どもの見守り ベビーカーで外出の補助，幼稚園の迎えに同行，外遊び（家の近所・公園）の相手
家事の手伝い	掃除機をかける，ガラスを拭く，洗濯干し・取り込み，庭の草取り 一緒に料理（餃子・ケーキづくり）
上の子の遊び相手（留守番も含む）	お歌，ダンス，積み木・自動車など遊具を使って遊ぶ，かくれんぼ，かけっこ，散歩 おんぶ，抱っこ，季節の行事の飾りつけ手伝い，あやとり，折り紙，手遊び
その他	下の子のおむつ交換，母親の話し相手，母親の友人の子どもと遊ぶ，訪問者への対応

表２　【複数の子どもを育てる母親の状況の理解】

中カテゴリー	小カテゴリー
《子どもをよく知る母親》	『子どもの特性を把握している母親』
《母親の身体的負担の理解》	『体力を要する育児』
	『複数の子どもの世話をする育児の大変さ』
	『育児による母親の疲労』
	『育児により休息できない母親』
《母親の心理的負担の理解》	『しつけの線引きが難しい』
	『子どもの成長発達に関する気がかり』
	『母の育児疲れの軽減のために必要な傾聴』

心がけ，疲れている《母親の心理的負担の理解》をし，負担を軽減したいと考えていた．

２）【きょうだいがいる子どもの状況の理解】（表３）

《年齢に応じた子どもの成長発達の理解》として，３歳児が下のきょうだいに嫉妬し，母親にかまって欲しがる一方で，「３歳児と５歳児は６ヶ月の妹のことをかわいがっていました」と妹に優しく接する姿を見て，『きょうだい関係における社会的発達の理解』をしていた．これは「５歳児と３歳児は喧嘩したけど，兄の方から引いて，我慢しているように見えた．」という学生の記述からもうかがわれた．また，個々の子どもと接する中で，5～6ヶ月児の体重や歯の萌出などの『子どもの形態的成長の理解』や，５ヶ月児の喃語，７ヶ月児の人見知り，３歳児の言葉の発達などの『子どもの心理・社会的発達の理解』をしていた．さらに，４ヶ月児は「首がしっかりすわっているので縦抱きできます」，５ヶ月児は「ハイハイができそうです」，６ヶ月児は「寝返りができるようになりました」，「一人でお座りしていました．でも，まだ安定していない感じだった」，７ヶ月児は「活動が活発で，よく寝返りしてごろごろ動きます」など，訪問毎に発達する『子どもの精神運動機能の発達の理解』をしていた．

《子どもの成長発達の特徴の理解》として，学生は，３歳児は「だいぶ言葉が話せるようになってきています．初めて会った時より数倍上達してきて，私たちの言葉もよく理解して聞いていると思います．オウム返しも上手になりました．」と記述し，訪問毎に変化する子どもの発達の様子から『子どもの成長発達の速さの理解』をしていた．同時に，他の３歳児との比較から言葉の発達の違いを感じ，『子どもの成長発達の個人差の理解』もしていた．

３）【新しい体験や感謝される体験からの学びや喜び】（表４）

《新しい体験や感謝される体験からの学び》として，６ヶ月児は「物を何でも口に入れるので誤飲に注意が必要」，３歳児は「車道に出ようとしたり車の後ろに行ったりするので注意が必要」などと記述し，『子どもの事故防止の必要性や対策』を学んでいた．また，３歳児の下のきょうだいへの嫉妬の緩和方法として，「学生が下の子どもを見ている間に上の子どもと母親との時間をつくるとよいのでは」と考え，『育児方法の工夫と模索』をしていた．さらに，学生は生活の場で活動する中で，認知症のおばあさんが突然家に入ってきた時の対処や母親の友達とその子どもたちの訪問時の対応など，『近所付き合いの体験からの学び』も得ていた．同様に，『受診時の付き添いからの学び』として，３歳児の子どもの歯科受診などに付き添い，待合室や診察室での子どもの自宅とは違う場で過ごす様子を知り，母親の診察中の子どもの世話の必要性を学んでいた．『母親の出産体験の語りからの学び』として，家族が出産に立ち会うことやカンガルーケアが母親の満足のいく体験につながることを学んでいた．

《新しい体験や感謝される体験からの喜び》として，4～8ヶ月児が訪問毎に成長発達する姿や３歳児が訪問当初行えなかった片付けを１ヵ月後にできるようになったことに対し，「成長が目に見えてとても嬉しかったです」と記述し，『子どもの成長から得られた喜び』を感じていた．また，母親の‘学生さんがいるから買い物に行ける’や‘久しぶりにゆっくり休めてよかった’，‘子どもは遊んでくれて楽しかったみたいね’などの言葉から，自分が役立っていると実感し，『母親の感謝の言葉から得られた喜び』を感じていた．

学生は母親と子どもたちと一緒に過ごす中で，子どもの世話をしたり，一緒に遊んだりすることにより人間関

表３　【きょうだいがいる子どもの状況の理解】

中カテゴリー	小カテゴリー
《年齢に応じた子どもの成長発達の理解》	『きょうだい関係における社会的発達の理解』
	『子どもの形態的成長の理解』
	『子どもの心理・社会的発達の理解』
	『子どもの精神運動機能の発達の理解』
《子どもの成長発達の特徴の理解》	『子どもの成長発達の速さの理解』
	『子どもの成長発達の個人差の理解』

係が築かれ，深まる体験をしていた．「帰りに，母親がお姉さんたちがそろそろ帰る時間よ'と言うと，○○（３歳児）は自分から学生の方へ来て，握手を求めてきて，“握手でバイバイ，また今度，バイバーイ”を初めて○○の方からしようとしてくれました．いつもは母が誘導してやるので嬉しかったです.」と喜びを記述していた．これは活動をとおした『母子と学生との人間関係の形成』を意味し，訪問最終日に「今日が最後なのかと思うと，本当に寂しく，これからのこの二人の成長を母と一緒にみていきたかったと残念に思いました」とボランティアが終了となる名残惜しさを感じていた．

４）【母親の育児方針を尊重する大切さの理解】（表５）

学生は《母親の育児方針の理解》として，3歳児に「“ありがとうございました”“どうぞ”“いただきます”“ごちそうさま”といった言葉をきちんと言って欲しいと考えているようです」と，母親が子どもに日常生活に必要な言葉を覚えて言える子になって欲しいと考えていると把握していた．また，“ご飯を食べないとおやつはだめ”などの『母親のしつけに関する育児方針』や，母親の'児をむやみに過保護にしない'，'子どものペースに合わせつつ割り切らないと'などの言葉から母親の『子どもの年齢や特性に合わせた対応』を理解していた．さらに，母親が子どもと一緒に餃子やケーキづくりや庭の草取りをするなど，実生活の中で子どもの遊びを提供する『母親の生活の中で子どもを遊ばせる工夫』をともに体験し，母親の育児のあり方を理解していた．その上で，《母親の育児方針にそった対応》として，『母親の育児の決まりに従う』とし，母親の許可なく自分が子どもを注意しないように考えたり，『母親の対応を見守る』様子がうかがわれた．

Ⅴ　考　　察

１．ボランティア活動における看護学生の学びや体験について

【複数の子どもを育てる母親の状況の理解】では，3～5歳になる上の子どもたちの実際の活発さにふれ，乳児と複数の子の世話をする母親の状況を実感として受けとめたことがその理解につながっていた．恵美須[5]は育児支援ボランティア活動により子育て中の母親が体力的にも気持ち的にも大変な中で頑張る生活実態を学生と住民が切実に理解できていたと述べている．今回の学生も母親の大変な状況を理解していたが，さらに，育児をとおして我が子の好奇心旺盛な特徴や排便習慣をよく捉えて対応する様子をみて，《子どもをよく知る母親》に尊敬の

表４　【新しい体験や感謝される体験からの学びや喜び】

中カテゴリー	小カテゴリー
《新しい体験や感謝される体験からの学び》	『子どもの事故防止の必要性や対策』
	『育児方法の工夫と模索の学び』
	『受診時の付き添いからの学び』
	『近所付き合いの体験からの学び』
	『母親の出産体験の語りからの学び』
《新しい体験や感謝される体験からの喜び》	『子どもの成長から得られた喜び』
	『母親の感謝の言葉から得られた喜び』
	『母子と学生との人間関係の形成』

表５　【母親の育児方針を尊重する大切さの理解】

中カテゴリー	小カテゴリー
《母親の育児方針の理解》	『母親のしつけに関する育児方針』
	『子どもの年齢や特性に合わせた対応』
	『母親の生活の中で子どもを遊ばせる工夫』
《母親の育児方針にそった対応》	『母親の育児の決まりに従う』
	『母親の対応を見守る』

気持ちを感じていた様子がうかがわれた．このため，子どものしつけや成長発達を気にかけながら育児をする母親をボランティアの自分がサポート資源となり，支えたい，休息して欲しい，話すことで気持ちを楽に過ごして欲しいという思いにつながったと推察された．

【きょうだいがいる子どもの状況の理解】では，学生は上の子との遊び相手をしながら上の子どもの寂しい気持ちや嫉妬の気持ちを感じとり，一方で乳児をかわいがる様子も見て，きょうだい関係により発達する心理・社会的特性を理解し，きょうだいがいる子どもの状況を実感したと考えられた．恵美須[6]の調査でも同様な結果は得られたが，今回は子どもの成長発達に関する理解がより深まっていた．これは学生が訪問毎にその日の子どもの様子を詳細に記述したことが理由と考えられ，５ヶ月にわたって変化する子どもと継続してふれ合うことが成長発達の速さの特徴の理解につながり，さらに，訪問先に訪れた同年齢の子どもとの比較が成長発達の個人差の理解につながっていた．

【新しい体験や感謝される体験からの学びや喜び】では，子どもが安全に過ごせるよう事故防止の必要性を理解して対策を考えたり，子どもの状況に応じた対応や育児方法を模索するなど，学生なりに母子が順調に生活できるよう考えていた様子がうかがわれた．これらは家庭という生活の場で継続した活動による学びと考えられた．また，育児支援に対する母親の感謝の言葉や学生を楽しみに待つ子どもとの関係の深まりから，喜びや人の役に立ち頼りにされているという自己効力感を得ていたと考えられる．これが母子のためにもっと何かしたい，役に立ちたい学生の思いを促進し，学生が何をすべきか考えて行動することにつながっていたと考えられる．對木ら[7]は看護学生ボランティアによる家庭育児支援は母親にとって育児支援を受ける場であると同時に，看護学生にとっても勉強する場となっていたと述べている．今回，学生は子どもの遊び相手となり，家事を手伝うだけでなく，母子から多くの学びを得ており，ボランティアを受ける側，する側双方向の関係が築かれていたと考えられた．また，北川ら[8]は学生のボランティア活動において自分の役割を理解し達成しようとする責任感ができたと述べており，今回も同様に，学生は育児支援の役割を積極的に果たそうとする姿がみられた．

【母親の育児方針を尊重する大切さの理解】では，学生は育児支援の立場をわきまえ，母親の育児方針を理解し，見守り，母親の意向を尊重した行動に努め，方針にそった対応に心がけていた．これまでの調査ではこのカテゴリーと類似した内容はみあたらず，今回は学生が５ヶ月間の関わりで母子と深く知り合い，母親の考えをよく知り，育児支援の立場で自分が何をどのようにすべきかを考え，行動していた結果と考えられる．また，学生のボランティア参加前の研修やボランティアマニュアルもこの学びを助けたと考えられた．香春ら[9]はヘルスボランティア活動をする看護学生を対象とした調査で，学生が活動をとおして人々や地域への理解を深め，ボランティア活動のあり方を学んでいたと述べている．今回，学生は母子を深く理解し，母親の育児方針を尊重した対応をとっており，ボランティア活動のあり方を考えた行動ができていた．

２．ボランティア活動を看護学生が行う意義と今後の活動への示唆

今回，学生が育児支援のために訪問した事例は，核家族で二人ないしは三人の育児を行う母親の家庭であった．訪問先の母親は学生のボランティアを希望しており，地域の保育サポーターなど気軽に利用できるサービスの必要性は高かった．実際に複数の子どもの育児をする母親の身体・心理的負担は大きく，学生がいる間に買い物に出かけられ，学生が洗濯や庭の草取りを手伝うことは家事の負担の軽減になり，母親は貴重な時間を確保できていた．学生は大学で学んできた看護の専門的知識や技術に加え，ボランティア参加前に小児の成長発達や救急処置などの必要な講義を受けていた．このため，母親は看護学生だから安心して任せられ，母親が買い物に出かける間，子どもたちとの留守番を学生に任せており，看護学生が行う育児支援ボランティアは子育て中の母親をサポートするサービスの一つとして意義があったと考えられた．一方，看護学生がボランティア活動を行う魅力として，視野を広めたい，人の役に立ちたい，人と出会う機会を得たいという志向をほとんどの学生がもっていたといわれる[10]．今回，ボランティア活動に参加した学生もこれらの志向を満たしつつ，活動を続ける中で母子との人間関係が築かれ，参加したほとんどの学生が卒業まで活動を継続していた．

ボランティア活動と教育との融合した教育方法として「サービス・ラーニング（service learning）」が米国の大学改革策として普及し，日本にも導入され始めている．この教育効果は看護にも社会のニーズを把握し，パートナーシップを形成する看護職者の育成を目的とした看護

学生の教育プログラムとしての可能性を示唆するといわれる[11]．今後，看護学生が行う育児支援訪問ボランティアの意義をふまえ，この活動が地域社会全体で親子をサポートするシステムとして機能できると考えられ,「サービス・ラーニング」に関する検討の必要がある．

Ⅵ．本研究の限界と今後の課題

本研究はボランティア活動の開始年度の学生11名の活動報告書のみからの分析であり，２事例で対象数が少なかったこと，２家庭の親子の特性の違いが研究の限界であり，今後の課題でもある．本活動は今日まで継続しており，今後も事例を積み重ねて研究を続けたいと考えている．

Ⅶ．おわりに

育児支援訪問ボランティアは学生に貴重な体験や学びをもたらし，支援を受けた母子は必要なサポートを受けられる機会となり得ていた．今後も育児支援ボランティアが母子や学生双方にとって実りがあり，また，大学の地域貢献が果たせるよう検討し，活動していきたい．

謝　　辞

今回，ボランティア活動にご協力下さいました家族の皆様，調査にご協力下さいました学生の皆様に心より感謝いたします．

注）本研究は平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(c)課題番号15592285）による助成を受けて行った研究の一部である．

引用文献

１）国立社会保障・人口問題研究所ホームページ　第13回出生動向基本調査：http:/www.ipss.go.jp/doukou13pd（2008.10.1）

２）小野美奈子，松本憲子，川原瑞代，高橋ユキ，中村千穂子，瀬口チホ：育児支援ボランティアを組織し活動した看護学生の成長過程，宮崎県立看護大学研究紀要，4(1)：8-19，2004.

３）吉村恵子，田中千鶴子：看護学生のボランティア活動における「家族」の学び　２泊３日の障害児サマーキャンプを通して，家族看護学研究，14(2)：140，2008.

４）恵美須文枝：地域と大学の連携による育児支援モデルの開発と実施評価，平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(c)）研究成果報告書，64-65，2006.

５）前掲書４）

６）前掲書４）

７）對木聖恵，岡田由香：看護学生ボランテイアによる家庭育児支援の意味，母性衛生48(3)：216，2007.

８）北川かほる，三瓶まり，福井典子，南前恵子，前田隆子，笠置綱清：ボランティア体験が学生にもたらす教育効果（Ⅱ），鳥取大学医療技術短期大学部紀要，32：35-40，2000.

９）香春知永，田代順子，及川郁子，小澤道子，平林優子，菱沼典子，酒井昌子，宮崎紀枝，三橋恭子，森明子：ヘルス・ボランテイア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方，聖路加看護学会誌9(1)：11-17，2005.

10）高橋弘子，岡田由香，恵美須文枝，鈴木享子，園部真美，谷口千絵，水野千奈津：看護学生のボランテイア志向性に関する実態について―育児支援ボランティアを中心に―，日本助産学会誌19(3)：210-211，2006.

11）松谷美和子，田代順子，香春知永，酒井昌子，三橋恭子，平林優，森明子，菱沼典子，川越博美，及川郁子，小澤道子：看護教育方法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー，聖路加看護大学紀要，30：31-38，2004.